

● Dr. 井上林太郎の書籍紹介 10周年を記念して

設立10周年、おめでとうございます。私が手術を受けたのは2004年6月ですから、私も次の定期検査で無事でしたら10年を迎えることができます。悪性軟部腫瘍の場合は、一応の目安が10年といわれていますから、二重の喜びとなります。ただし、今私にできることは、祈ることのみ。

最初に投稿させていただいたのは、手術してから約2年半経った2007年3月。今後のことを考えると不安な毎日でしたが、次第にこの経験を生かしたい。どうせこの世を去るのならば、人のために少しでも役立つことをして、と思うようになりました。そして、思いついたのが、「本の紹介」。幸いなことに、廣川裕理事長先生の許可を得ることができました。さらに、2011年1月からは、「がんになって」というタイトルで私の拙い経験、思いをまとめさせて頂いています。この場をお借りして、廣川先生を始めとし、理事の先生方に御礼申し上げます。また、ボランティアスタッフの皆様、会員の皆様からは、いつもパワーを頂き、不才ながら、投稿させて頂いています。再度、御礼申し上げます。私の我儘、自己満足かもしれませんが、今後ともお付き合いの程、よろしく願います。

先日、これまでに紹介させて頂いた本を読み返しました。次の文章には、今回も、心を打たれました。「主治医から、余命を告げられたらどうすればいいか。」これが、私から皆様への10周年のお祝いの品です。お受け取りして頂ければ幸いです。

『医は「仁術」といわれてきました。「仁」とは思いやりです。二十世紀には患者さん本人に病気の悪化を、そして死を隠すことで「仁」、「愛と思いやり」を発揮してきました。しかし、二十一世紀には患者さんに病気の悪化を告げて、短い命を告げて、そしてこの「仁」が「愛と思いやり」が、どのような形で発揮されていくのかということが、われわれ医療者側の大きな課題であると思います。

死が近いことを知らされて、死を直面しての二十一世紀の死生学で、死生観とは、けっして諦めることではない。他人に「諦めろ」と言われて諦めることではない。

「悟ること」でもない。「悟ったふりをする」でもない。生きたいならばっきり生きたいという。そして、少しでも自分の思うようなことに近い人生を生きることであると思います。

もし死に直面していても、どうかして、心落ち着けられる、心安らかであることは、誰しも希望することであると思います。そのためには、自分が生きてきた人生に納得できるとまではゆかなくとも、それでも、少なくとも終末の医療に納得できていること、安心できる、信頼できる医療者が傍にいることは、大切な条件であると思います。

「人間はみんな死ぬ」。そんなことは、誰だって百も承知！ そんなことは、百も承知なのですが、いまここですぐ死ぬではありません。いつかは死ぬけれど、いま死ぬのではないから生きていられるのです。何か少しでも、小さくとも希望を持って生きるのです。たった一度の、たった一度の人生です。どの、どんな時代に生きても、たった一度の人生です。何も悪いことをしていないのに、自分ががんになったのは不公平です。特に若くしてがんになった方は、人生不公平です。自分の病気を知って、言うときは言って、頑張って生きて、人生、不公平だからこそ、頑張って生きて、生きて、そして、医療に、自分の人生に、少しでも納得していただけたらと思います。私は、応援しています。必ず応援しています。』

一都立駒込病院名誉院長・佐々木常雄著「がんを生きる」より



理事 井上 林太郎